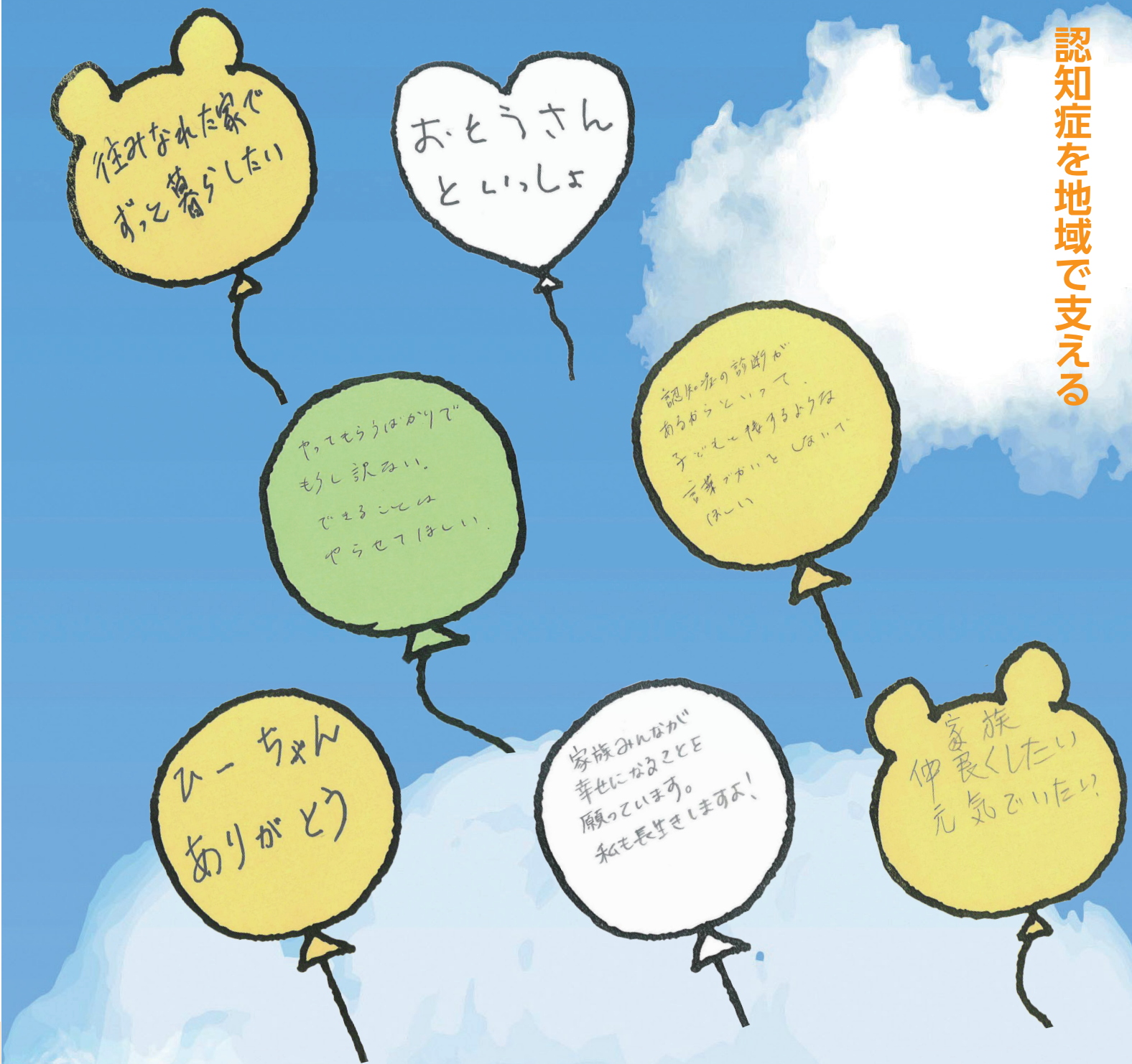


認知症の方の声



介護者の想い

認知症と診断された夫を13年間 介護された佐藤さん(仮名)にお話を伺いました。

「夫の様子がおかしいと感じたのは、ごみ出しの曜日を間違える、間違えるので復唱させようとしても言えない、家の中の決まりがわからなくなる」ということからだったと振り返ります。

佐藤さんがまず最初に考えたのは病院への受診。「夫も、何かおかしい、悪いところがあるのではないか、と感じていたのか受診に

抵抗はありませんでした」認知症と診断された時は、やっぱりという気持ちだったと話します。

佐藤さんは、なるべく人と接した方がよい、社会参加が必要だと考え、2人で市民総合大学や旅行など、さまざまな場所に出かけました。「認知症だから、人と違う動き方をしたり、場にそぐわないことを言い出して、恥ずかしい思いもしました。でも、講師の先生に認知症であることを話すと、優しく対応してもらえました」と当時を思い出します。

そのような生活も、認知症が進むと難しくなり、介護保険サービスを利用し始めたのは、診断を受けてから5年ほどたった頃。

「介護をしていて、イラッとして言い返したり、ひとりで嘆いたりしたことは何度もありました。医師に、自分がうつ病になりそうだと話したところ、美味しいコーヒーを飲んで温かいお風呂に入ってください、と言われたことをいまだに忘れません。自分をいたわって、ということなんですよね」

介護保険サービスを利用したり、自分をいたわる時間を作りな

がら佐藤さんは在宅介護を続けました。その思いは、できるだけ自分でやって後悔しないようにしたい、という気持ちが強かったからだと話します。

「夫は、人をだましたり悪口を言うような人ではなく普通に生きてきた人間です。その人が、たまたま認知症という病気になってしまっただけなんです。だから、ひとりの人間として大事にしたいと思っています」

当時の様子を知る担当ケアマネージャーは、認知症になってもご主人の表情が穏やかだったのは、そんな佐藤さんの気持が伝わっていたからではと話しています。

最後に、皆さんに伝えたいことを伺いました。

「かかった病気がたまたま認知症だっただけで、その人であることに変わりはないのです。怒らないで、意地悪をしないで、ひとりの人間として、尊厳を傷つけないようにしてほしい」

急速に進む高齢化。本庄市でも3割の方が高齢者です。そして高齢化とともに、認知症の方も増えていきます。令和7年には、65歳以上の約5人に1人が認知症を発症するといわれています。

「家族と仲良くしたい」、「住み慣れた家ですっと暮らしたい」、「やってもらうばかりで申し訳ない。できることはやらせてほしい」これらは認知症の方の声です。認知症は特別な病気ではなく、誰もが関わる可能性のある脳の病気です。「もし、自分や大切な家族、友人が認知症になったら」と考えてみてください。この病気との関わり方や、住み慣れた地域でいつまでも暮らしていくためにできることを考えてみませんか。

※市内の介護施設等の協力により集めた認知症の方の声を一部紹介しました。

認知症普及啓発イベント オレンジウィーク in ほんじょう2022

認知症の人と家族にやさしい地域を目指して

★介護保険課 ☎25-1722

展示時間 午前9時～午後4時

相談 午前10時～正午、午後1時～3時

※セルディは13日のみ展示、相談ともに午後1時～

申込 事前の申込は不要です。直接会場へお越しください

そのほかにも講演会や体験会などのイベントを開催します。詳しくは、広報ほんじょう8月号または市HPをご覧ください。



市HP

パネル展示・相談会

認知症に関するパネルや創作品の展示、認知症の方の声の紹介を行います。また、グループホームや地域包括支援センターの職員が認知症に関する相談にも応じます。

日程 9月13日(火)～16日(金)

会場 市役所1階市民ホール、セルディ